

荒木青春サロン

平成5年にスタートした「荒木青春サロン」は毎月一度行われ、政治や宗教を真剣に語り、また時には、留学生を招いてその国の風俗や文化について語ってもらいながら、我が国を知るという有意義な勉強会である。

サロンで荒木雄一郎が自ら学び、語りながら纏め綴ったものの一端がこれである。



指揮棒を振る岡山大学時代（右）

中国を語る

平成5年2月から12月まで「中国を語る」というタイトルのもと市民文化講座を開きました。10回の講座全文をまとめたのがこの草稿です。

中国は約93%が漢民族と言われますが、残りの7%の中に56の少数民族があると言われます。漢民族と言っても黄河流域と揚子江流域では、気候も文化も違う。だから漢民族はひと言で語り尽くせない複雑な民族です。

日本国、日本民族の特性がどのようにして育まれてきたかを知り、今後のアジアの平和・安全を語る上で中国を避けて通れない。そのためにも中国の民族性、歴史、文化を学ぶことで今後どのように中国と関わって行くべきかをこの講座のメインテーマとしています。

中国では秦の始皇帝から現在に至るまで約2200年の間、皇帝統治が行われてきました。この皇帝統治という政治の思想では、基本的な2つの思想が交代して現れています。

一つは儒家の思想、儒学とも言います。代表的な人物は孔子です。孔子が主張したのは、王道政治あるいは徳治政治というもので、皇帝や国王は道徳的に立派な人であり、それに仕える家臣も立派な模範となる人であり、年少者は年長者を敬う。徳治政治とは、法律よりも君主が範を垂れることで国を治めるのです。

秦の始皇帝が中国を統一するまでは、孔子をリーダーとする儒家の思想が広くあり、春秋戦国時代の国王は権力で民を抑えながらも儒学に敬意を表しました。それに対し、始皇帝は民を法律で縛り、恐怖政治で人民を抑えることが良い政治だとしたのです。恐怖政治・現実主義・霸道主義をもってあの広い中国の統一ができたのです。これを法家の思想とします。

始皇帝以降2000年にわたる中国の皇帝統治は儒家による徳治主義と法家の法律万能主義という二つの政治思想の間を右に左に揺れながら動くわ

けです。たとえば400年続いた漢の時代は、始祖の劉邦は穏やかな法家の統治でしたが、後継者の皇帝はしばしば儒家の思想に近寄ります。それは法家の思想であまり長く治めると、人民がやがて皇帝に対して敵愾心をいだくようになり、厳しい政策ではだめだと人民に優しく寛大な皇帝がでてきます。すると人民はすぐ甘えてしまい、地方の官僚も汚職が始まる。そのため徳治・人道主義の政治は長く続かず、また厳しい法治政治に戻るという繰り返しです。

『十八史略』を読むと、徳治主義の皇帝はあまり成功せず、結局は法家の厳しい思想でないと中国は統治できないことがわかります。

ここで日本と中国の比較論として日本の統治の特異性をお話しします。日本では天皇が一応最高位に位置づけられてきましたが、天皇親政の奈良・平安朝と明治時代を除いて、太政大臣や征夷大將軍という軍事力・政治力を持った実力者に天皇が統治を任せるという形をとり、直接政治をしていません。そのため天皇と民衆は敵対する関係にはなりません。これが日本の政治の特色だと思います。日本は国土も狭く、海に囲まれ外敵の脅威も深刻ではない。中国に比べるとスーパーリーダーを必要としない穏やかな統治が可能な国です。

ところが中国では、皇帝と民衆が常に敵対関係であるため、皇帝は民衆から直接搾取し、民衆は搾取に堪え兼ねて革命を起す。この繰り返しなんです。1つの王朝が打倒される時には、それまでの予備的ステップはいろいろあっても、最後は民衆が立ち上がってそれにリーダーが乗っかって、民衆が天下をひっくり返す。その最後の例が毛沢東です。彼は農民による政権の奪取をし、農民による中国の支配を目指しましたが、結局、彼自身が皇帝化してしまいました。

中国は国土があまりに広いため、物凄いスーパーリーダーが皇帝として厳しく君臨しなければ

統治できない国なのです。そしてそのスーパーリーダーを最後は民衆が打倒するという厳しい生き方の国なのです。

中国は辛亥革命以降ついに皇帝統治が終わりを告げ、共産党支配の国になります。毛沢東による農民・無産階級が統治する中国になりました。しかし人民公社の失敗、文化大革命等で共産主義に限界が見え、鄧小平が実権を握ったあたりから経済的には解放路線すなわち共産主義の放棄（資本主義）、しかし権力を握るという意味ではあくまで共産主義という道を歩み始めます。

西側諸国から見れば、共産党という政治集団で権力を握り、経済政策は資本主義という2本立ての政治は信じられませんが、あの広い中国を支配するためには、ものすごく強力な指導者がすべての権力を自分に集中できるような（共産党1党支配）、そういう組織が無くてはならないのです。ですから中国は共産主義という政治スタイルはあくまで堅持するでしょう。

ここからは中国の経済解放政策についてですが、鄧小平が経済の解放化政策に入ります。出身地の四川省で人民公社を廃止して請負生産制を始めます。各農家に土地を貸し、収穫量の半分を政府が買い取り、残りは自由に売って良いとしました。そのため生産性が上がり農家の収入が増えました。四川省で成功した請負生産を中国全土に拡げたら、それまでは餓死する農民がいたところから、余剰を外国へ売れるほどたくさん作れるようになりました。

その実績をふまえ、経済開放政策を工業やその他の方面にまで実行するわけです。近代産業のベースになる鉄鉱・電力・発電所を日本の商社と組んで手がけます。しかし中国は最高権力者が全国に命令すると、各省が一斉に同じことを始める。それをコントロールする全体的な計画・調整機能がないので重複投資になってしまう。そして外貨が底をつく。

つまり経済開放化政策が無秩序に走り出しますが、すぐに重複投資になって外貨が無くなり抑制される。奨励されたり、抑制されたり、その繰り返しは何度も行われます。その陰には開放化を進める進歩派と旧来の教条化された共産主義を守ろうとする保守派との権力闘争があるのではないかと思います。

農業の自由化という所から経済の開放政策に入ったというのは、中国に大変プラスになりました。しかし、中国が西欧化して経済開放化政策を実行するためには、中国特有の難問がたくさんあるのです。

中国の大きな国土をマネジメントするための強力な権力、その権力争い。中央政府にも地方政府にも権力争いがあり、それが中国の近代化を左右する大きな問題の一つです。

そして政治が党と官僚の二元政治であることも問題です。共産党と官僚組織の2本立て、司法・行政・警察など、国家と同じ機能を県であれ市であれ持っているのです。中国では中央も地方も政府です。中央が命令したことを地方がその通りにしなくても、中央にはわからない。地方政府の長が自分のエリアでは圧倒的な支配力を持って、やりたい放題できる。

そのため中央と地方、党と官の権力の引き合いが起こる。たとえば市役所には実務を行う市長や局長の他に共産党の委員がいるわけです。その委員が行政の実務を監視していて、党の委員には命令権があります。軍隊であれ企業であれ市であれ、すべての組織には実務を実行する指揮命令ラインと別に共産党の委員が入っていて指導している。党と実務ラインとの二重権力構造になっていて、これが中国を非常にややこしくしています。

もう一つの大きな問題は、中国には元という通貨と人民元という通貨の二つの通貨があります。お金の2本立てです。元と人民元はイコールではないのです。元は外国人が使ったり、外国とのお

インド文明と釈迦の思想

インドという国は、人口約8億人。中国が12億人。地球の全人口が50億人と言われていますから、中国人とインド人で4割を占めます。約4000年にわたって、非常に特異なインド文化・インド文明をつくってきました。インドは現在でも特異な文化をもっていますが、その例としてヒンズー教とカースト制を挙げることができると思います。

インドは宗教・哲学の分野で、人類最高の高みを作ってきました。私はウパニシャッドを少々読んできましたが、インドの哲学の難解なこと、高度なこと、特異なこと、これはもう驚くべきものであります。インド哲学は宗教と不可分一体になった独特の世界をもっていると強く感じたわけです。

インドを地図で見ますと、インダス河とガンジス河という大きな河が流れています。両河流域が低地で耕作に適した豊かな平原です。デカン高原は人の住みにくい所です。インダス河流域が、インドで最も古くから開けた土地で、世界4大文明の一つ、インダス文明が栄えたところ です。

約3500年前、インダス河の上流、西北方面からアーリア人という人種がインドに入ってきます。アーリア人はヨーロッパ人と血統的にも文化的にも非常に似ている人種です。その人達がインド原住民の上に位置し、新しいインド社会の上層部を構成していきます。

そして釈迦が生まれた時より200年も後の紀元前300年ころに、マウリア王朝が、インドで初めて天下を統一します、その時ですらデカン高原から南方はまだ未開の土地でした。

このアーリア人達が侵入した3500年前から釈迦が生まれる2500年前までの1000年間はヴェーダ時代といわれます。

アーリア人の文化は宗教を主体に、宇宙はどのようにして生じたのか、宇宙を支配し運行してい

るのは何者か、人はどのようにしてこの世に存在したのか、どのように生き、死んでいくのか、死んだ後はどうなるのか、というふうに宇宙と人間との関係を空想し研究、分析するものです。アーリア人は宇宙を支配する様々な神を創造し、お願いごとをし、供え物をする。それがインド原住民の文化と衝突し、混ざり合い、その中から新しい宗教的な儀式が生まれます。神を誉め、畏れ敬う言葉が口承で伝えられ、ヴェーダという本になるわけで、日本語では聖典と訳します。

一番最初に出来た本がリグ・ヴェーダといわれ、千編の詩から成り、それから第2期、3期、4期とできて、最後にウパニシャッドという哲学書ができます。インド人にとって宗教とは哲学であり、哲学が宗教なのです。

インド人の基本的な考えでは「時間」は循環する。だから一度あったことは将来必ずまた起こる。過去に起こらなかったことは、未来にも絶対起こらないというものです。インド人が考える「時間」はグルグルグルグル、フラフープのように同じ事が循環している。物質であれ精神であれ、循環している歴史観の中で、インド人は非常に忍耐強い、あるいは苦勞することを厭わないという気質をもっています。インド人の禁欲主義は肉体を痛める、即ちヨガを行う、座禅をする、針のムシロに座るといような苦行をすることに現れています。

ヴェーダ時代の終わり頃に、バラモン教が誕生します。バラモン教の祭祀の仕方がある本で読みましたが、私は4人の神官がそれぞれ役割を持つということを読んだ時、これは日本神道と全く同じだと思いました。日本の神道はインドからきたのに間違いないと公言していたら、ちゃんとした学者が同じことを言われました。ですからこの説は保証付きです。日本の神道はインドからシルクロードを経て、朝鮮に伝わり日本にきたのです。インドのヴェーダに端を発してバラモン教がかな

金の決済に使うものです。人民元は国内で中国人同士で流通しているお金です。

中国ではあらゆる物が公定価格でコントロールされています。外国とも流通できる元を国内で使うと物価のバランスが崩れます。そのため元と人民元とで物価の価格差というものをプールしているのです。

中国が国際経済の中でマーケットというものに参加して行くためには、お金の交換性が自由でないこと、国内のお金と外国向けのお金の二重レートであるということ、つまり中国の経済が統制経済であるということは、乗り越えにくい壁だと思います。

厳しい言い方かもしれませんが、中国の近代化は100年200年経っても難しいと常々私は話しています。日本が明治維新（近代化）に成功したのは、徳川300年の間に教育ができていた、殖産興業がよく浸透した、道德秩序があった、役人に清廉な人が多かった（これは中国の孔子の儒学の賜物だと思いますが）というように、社会に倫理道德とか殖産興業とか資本の蓄積とか、諸々の近代国家へ浮上するための下準備というものが、徳川300年の間にできていたからです。

ところが中国にはそのような社会的な蓄積がない。土壌がないところに、近代工業とか産業だけを持って来たら、それはうまく行かないと思います。

そのためにも長い時間をかけて農村の民度を上げること、農村の中小企業を殖産興業すること、教育を普及すること、社会の治安とか常識とか、そういう基盤を強化培養していかないと中国の近代化は難しいと思います。

最後に、日本が現在のような発展を遂げたのは何故でしょうか？

我々が偉大な民族であったというだけではなく、歴史上の幸運に恵まれ、隣国中国がこれまでの歴史の中で、日本の平和や安全に大変貢献した

ということを忘れてはならないと思います。中国に対しては感謝もし、中国から学んだことをよく知ろうと思います。これからの日本、アジアの平和ということを見ると、中国がこれからどのような歴史を歩んでいくかということが、我々の将来に非常に大きな要素となると思います。

アメリカよりも中国の要素の方がウエートが高いかもしれない。そういう意味で、我々は中国に注目し、理解し、中国に対して良き友人としての付き合いをしていかなければなりません。

そのために、日本が何らかの貢献をするなら、一番良いことは日本の経済力で、中国人留学生をたくさん受け入れることです。我々は中国を商売のターゲットとして見るのではなく、あの国を着実に近代化するために我々の力で応援する、という息の長い視点が必要だと思います。

『中国を語る』より抜粋

平成6年2月発行

B5判 198ページ

り完成した段階で、シルクロードから中国へいって道教になり、さらに朝鮮を通して日本に伝来、神道になったと思います。

インドの宗教はバラモン教からヒンズー教へと変化し定着していきます。今から2500年前ごろにバラモン教やヒンズー教に対する批判的な思想や新しい宗教が現れてきます。その代表的なものが釈迦の仏教であり、ジャイナ教です。ジャイナ教はインドだけの宗教ですが、仏教は世界宗教になりました。

釈迦の具体的な教えはいっぱいありますが、非常に大事な、基本的な事の一つに四諦（シタイ）があります。四諦、生きていることは苦であるということ。

苦集滅道（クジュウメツドウ）、苦は執着と迷いのことです。苦は原因を退治すれば消滅します。般若心経にもこの四諦・苦集滅道についての言葉がでてきます。釈迦は人というものは生きている限り本質的に苦しみを持たずにはいられない。すべての生き物は滅びに向かって存在している、生き物だけでなく、あらゆるものに必ず滅びの時がくると言っています。

また一つは、すべての事柄には原因があるということ。これを因縁説といいます。世の中のすべての物は、因と縁によって生じると釈迦は言いました。すべてのことはもとに原因があり、それに条件が加わると一定の結果が起こる。そして、その結果はまた新たなことの原因になる、という意味です。

そして釈迦が言った大事なことは「中道」です。難行苦行をすることによって悟れると思うのは間違いである。節度ある修行をするのでなければ本当の知恵は湧いてこない、ということを釈迦は悟るわけで、これを中道といいます。

釈迦の代表的な言葉を一つ選ぶとしたら、釈迦が生まれた時に、3歩歩いて右手を上、左手を下にして、「天上天下唯我独尊」と言った、その

言葉ではないかと問われたことがあります。この言葉は非常に誤解され易い言葉なのです。

天上天下というのは、この世界中です。唯我独尊は私がひとり偉いんだということではありません。「私」という存在は貴重な存在である。私というのは人間の私達だけではありません。一つひとつに名前があり、個性があり、主体性をもって他にかけがえのないものとして存在している。そして存在したと同時に破壊に向かって生き続けている。必ず破壊はくる。その時がくるまで我々は甲斐ある、価値ある生き方をしましようというのが釈迦の思想です。

「天上天下唯我独尊」はこの宇宙で私もあなたもたった一つの貴い存在として、立派な一生を生きましようという意味なのです。倫理的に清らかに生きれば、自分の心が充足する。清らかな心で生きることが自分が一番満たされることである。だからそういう生き方をしましよう、と釈迦は言ったのです。

釈迦はバラモン教やヒンズー教の偶像崇拜を厳しく非難しました。そういう架空のものを崇拜することはとんでもないことだ、もっと自分自身に信念を持ちなさい。だから釈迦は釈迦自身をも頼ってはいけないと言われたのです。ダルマを頼り、自分が努力すること。人生は短い。最後まで努力をすること。修行することを忘れるな、というのが釈迦の最後の言葉だったのです。

インドでは土葬が主だったのですが、徐々に火葬が普及するようになりました。土葬にすると塚とか墓を建てることになります。釈迦はそれらを作って、後々、偶像崇拜的な吊いごとをすることを希望しなかった。だから川に流しなさいと言ったのです。

しかし、釈迦の遺志にもかかわらず、荼毘に付した遺骨はいくつもの部族が村にもって帰り仏舍利塔を建て祀られました。分骨の始まりではないかと思いますが、本当に偉い人の本当の気持ち

が、後に残った人々の勝手のために曲げられているのが現実です。偶像崇拜を希望しなかった釈迦ですが、非常に遺憾なことと思います。

その後インドにおいて仏教が滅び、南伝の仏教と北伝の仏教が、そのように色分けされてしまった実情について私が大胆な憶測で私流に判定させていただきました。

日本にはいろいろな宗教がございます。一つの仏教にどうしていろんな宗門宗派ができるのか。釈迦の思想が解ると、それを軸にみな納得できました。

これは富士山に例えるのが一番よくわかると思います。釈迦は富士山のとっぺんであります。富士山には4つの登山口がある。南をから登山する人は見下ろすと茶畑がひろがり駿河湾が見え、そのむこうには太平洋が見える、と言います。

北から登る人は茶畑なんかあるものか、富士五湖が見えて、そのむこうにはアルプスや日本海が見える、と言います。

東から来る人は海なんか見えるものか、向こうはずうっと関東平野で奥州に続いていると言います。

皆解っていないのです。2、3合目で自分の見える世界のことを話しているわけです。頂上まで登って、ぐるっと360度を見れば、すべての景色が皆見えるのです。なぜ皆富士山のとっぺんまで登らないのかと私は感じました。釈迦という富士山のとっぺんまで行き着いてみると、その裾野にある景色がすべて見えると言いたいのです。

朝鮮から伝わった仏教は聖徳太子の仏教をもって国を治めるという政策方針もあり、奈良・平安朝の貴族が大変に熱中します。これは釈迦に対する正しい認識よりも、加持祈禱とか怨霊の調伏とかいう密教、修験道も含めて、そういう期待が多かったと思います。鎌倉時代から徐々に仏教が民間の信仰として根付きます。足利尊氏は禅宗に帰依し、茶道の一期一会という言葉を作りました。

釈迦の思想から離れた日本独特のありようを日本仏教はつくってきました。

私は釈迦の思想がもっと多くの人に知られたらと願います。人を差別しない、人も動物も植物も、無機物も、本来的には上下の差がないということ。般若心経も不垢不浄、不生不滅、不増不減。汚れたものもなければ清らかなものもない、生まれるのでもなければ死ぬのでもない、増えるのでもなければ減るのでもない、釈迦の思想をそう表現しています。

『インド文明と釈迦の思想』より抜粋

平成6年10月発行

B5判 76ページ

人間—— 釈迦 ——の発見

私が勉強した本の中で、アンベードカル著「ブッダとそのダンマ」、中村元・三枝充恵共著「パウツダ― 仏教 ―」この2冊の本は、とりわけ私にとって有意義でした。

インドには、皆さんご存じのカーストがございます。生まれながらにして、人々に差別がある。1番上がバラモン、宗教的行事を司る人で最上位。次にクシャトリア、軍人とか貴族です。それからバイシャ、これは商工業者あるいは農民。最後にシュードラ。賤民といわれ、上位3階級に奉仕する汚れ役、嫌われ役のすべてをするのがシュードラです。

著者アンベードカルは最下層の不可触賤民の生まれです。この人の政治活動目的は、不可触賤民の公民権回復運動にありました。カーストの人たちが救われるためには、お釈迦さんの仏教を再発見しなければいけない、ということを知りました。

お釈迦さんは、カーストの差別を否定した人なので、アンベードカルはこの思想をもう一度ひろめることがなければ最下層のシュードラは救えないとして、そのために、ヒンズー教徒から改宗して仏教徒になります。それでインドで1600年ほど途切れていた仏教が復活します。20万人しかいなかった仏教徒が200万人、300万人という増加をみて、インドで仏教が復活するという契機をつくった大聖者アンベードカルです。

また中村元・三枝充恵共著「パウツダ」にもお釈迦さんの素顔が書いてあります。

お釈迦さんは、靈魂不滅・輪廻転生という思想を否定した人なんです。それから因果応報、これはインドではカルマという理論なのです。良いことをしたら来世で良い報いがあり、悪いことをしたら来世で悪い報いがある。だから現世で良い境遇に生まれる、あるいは悪い境遇に生まれるというのは前世で良いことをしたか、悪いことをした

かということで、その差が出てくる。因果応報です。これをカルマというのですが、お釈迦さんはそれを否定したのです。

古代インドの歴史と社会情勢について説明させていただきます。紀元前1500年頃にヨーロッパ人であるアーリア人、背が高くて色白、鼻の高い人種が入ってきます。そして土着のインド人と混血していきます。アーリア人は土着のインド人に対して優越的な地位にあったのです。そこから新しい文化が興り、新しい宗教が興るということになります。この新しい宗教とか文化、それがヴェーダ。ヴェーダは漢字では聖典と訳されます。紀元前1500年から紀元前500年までの1000年間を歴史上ヴェーダ時代と呼ばれています。アーリア人はインド土着民と融合しながら、新しい宗教的な世界を創っていきました。森羅万象やおよろずに八百万の神の存在する宗教的世界です。

ヴェーダ時代の千年間に、そういう崇高な神々の世界が想像され、神々を褒めたたえる言葉ができ、神々を祀る祭式、祭儀の執行の方法、きまりが複雑に形成されていきます。これを執行するのがバラモンの身分の人です。バラモンだけがその権限をもち、身分が次第に強くなっていきました。ヴェーダ時代の終わり頃、最終的にバラモン教という宗教を司る宗教者になります。

釈迦は紀元前500年前後に生まれ、80年の生涯を過ごされますが、釈迦が生まれる前にバラモン教が存在しているわけです。ヴェーダとバラモン教を骨子にして、今日まで続くヒンズー教的宗教観・世界観が成立していきます。

ヒンズー教の特質は、まず神があり、人間は靈魂をもち、その靈魂は死なないというところにあります。人間が死ぬと肉体は滅びますが、靈魂は死なずに新しい肉体をもって次の世に蘇える。ちょうど我々が服を着替えるように、何度でも蘇えるわけです。ヒンズー教では靈魂が一番大事で、肉体はそんなに大事な要素ではないのです。

肉体は仮のものでこれを軽んじ自傷すればするほど靈魂は高みにのぼり、生まれかわるごとに神の世界に近づくという思想です。

インドでは靈魂が限りなく神に近づくということがすべての人の理想でありましたが、多くの人は出家しようにもできないのです。出家すると髪を剃り、家族を捨て、家を捨て、職業をもてない。お金を稼ぐのを一切やらない。1日1食だけ一般在家の人から托鉢によって食事を頂く。瞑想にふけり座禅をし、木の根元や洞穴に住み野宿をして屋根の下に住まない、これがヒンズーの出家者の姿です。だから出家できるのはある程度財産があるとか、家族がない者などで、誰でもができません。

釈迦はネパールに近いカピラバットウという町で生まれたシャカ族の王子でした。父は王様です。16歳で結婚、1児をもうけ、28、29歳で出家します。修行して托鉢しながら瞑想にふけます。

「人間は何故こんなに苦しむのか」

「人はこの苦しみをどのようにすれば克服できるのか」

釈迦の最大のテーマであったと思うのですが、その他、当時のインドにおけるいろいろな哲学者、思想家と討論したであろうと思われています。

35歳で悟るまで、いろいろなヒンズーの苦行をやりました。1週間の断食、10日間寝ない苦行もやりました。いろいろな苦行で肉体を痛めてみたけれども、どんなに苦しめても魂が本当に安らぐ、涅槃に入ることはありませんでした。肉体を苦しめれば、魂の平安が得られるというヒンズーの考え方は真実ではないと最後に実感しました。釈迦はネイランジャー河畔のブツダガヤで瞑想に入り、すべてを悟ったといえます。

「我々すべての生き物は生まれながらにして、老いる、病む、死ぬという運命を背負って生きて

いる。あらゆる物は変化する。これは厳粛な事実である。このことを受け止めなければならぬ」ということであります。

我々の形がある。命がある。肉体を構成しているものは、生まれる前には土であったかもしれない。植物であったかもしれない。私が死んでも、もしそこへ放置されれば、体は分解されて土になり、草が生え、その草を牛が食べる。そうすると私の体は、あるときは草になり、あるときは牛の体を構成するわけです。あるいは何百年後か後に、また違う人として生まれ変わってくるかもしれない。このことはヒンズーの輪廻転生とは違うのです。輪廻転生は靈魂は変わらないで肉体は変わっていくのです。ところが釈迦は人が死ぬば靈魂もなくなるというのです。肉体は物質として還元して、この宇宙の中に何らかの形で残る。こういう移り変わりをヒンズーの「輪廻転生」と区別するために私は勝手に「生々流転」と称しております。人としてこの世に存在するということは偶然によるもので、ありがたく、感謝することではあるが、所詮仮のことであり、必ず滅びるので。大切なのはこの現実の生をいかに立派に生きるか、そのことのみである、ということです。

インドのパーリ語でいうと「ダンマ」、サンスクリット語でいうと「ダルマ」といいます。これらの言葉は釈迦の話や経典の中にたくさん出てまいります。これは天地自然の理法、あるいはこうあらねばならないという一つのルールです。太陽は東から上り西に沈む。春がくれば夏が来る。夏がくれば秋が来る。雨季が来れば雨が降る。秋が来れば収穫がある。世の中は一つの調和と調和的運行で保たれているわけです。調和がくずれると不都合なことが起こる。

人間の社会にもいろいろな調和がある。道徳であったり、戒律であったりする。あるいは人情であったりする。そういういろいろなものがダンマ、あるいはダルマです。それを常に正しく守つ

ていくことを釈迦は説いています。

釈迦「戒律を守るのも、善行も、祖先の供養も、見返りや利益のためではない。祖先の供養は祖先に対する敬慕の念であり、善行は人のダンマである。戒律は魂や精神に平安を得、心を清らかにするためにある」

ヒンズーの思想では靈魂の救済のために良いことをしよう、お供えをしよう、お祀りをしよう、そうすればその功德によって来世で靈魂が良いところへ行けるといいます。利益を目的として良いことをしようということになります。

利益を目的とした善行は善行ではない。善行というのは人がしなければならないことなのだ。それが人のダンマだから善行をするというのが釈迦の主張なのです。だから根本的に違います。

釈迦は日々新しく前進しながら、日々常に戒律を自分に課す生涯を送りました。人を救うためでもなく、自分の宗教をひろめるとか、自分の信念をひろめて有名になる、弟子を多くつくる、といったことは少しも釈迦の念頭にはなかったのです。一生歩み続けられて、ガンジス河流域をあまねく遊行されて大きな足跡を残されました。釈迦にとって一生が修行であり、遊行であったのです。

釈迦を信ずる人によって、後の世に仏教という宗教になるわけですが、亡くなる時に付き添った阿難に「阿難よ、お前に今のうちに言うておこう。私が死んだら、師がいなくなると嘆き悲しむかもしれないが、それはまちがいである。私を信仰するのではなくて、私が今まで説いてきたダンマ（法・天地の理・人が行わねばならない道徳）を大事にきなさい。決して私を頼ってはいけない」

釈迦の死後、信奉者たちは釈迦の行動を真似、その生き方を実践していきました。釈迦の言葉、行為を文字に残すための編集会議が行われて、記録が作成されましたが、現在ほとんど残っていません。以後、釈迦の弟子たちにより徐々に書き足されて阿含経典という最初の経典群が出来上がり

ます。20 くらいの教派に分かれ、仏教の分裂がおこります。各教派のリーダーがたちが、それぞれの釈迦の教えの解釈に従って経典を作り、たくさんの経典ができました。釈迦は在家のままの修行を立派なことであると説いたので、在家信者が増えていきます。これが大乘仏教なのです。大乘仏教によって仏教の大衆化、布教化が行われるかわりに、神格化した仏が誕生し、輪廻転生・因果応報が復活してしまったのです。仏教はヒンズー教化し、仏教の独自性、即ち釈迦の思想が失われることと相まって、衰退期にはいりました。

13 世紀初めイスラム教徒の軍隊がインドに入ってきた時に、まだ残っていた仏教総本山を徹底的に破壊するというで消滅します。仏教僧はヒンズー僧になりました。その間、仏教最盛期に書かれた阿含経典の思想は、タイ、ビルマ、ベトナム、カンボジアといった南方に伝わり、チベットからシルクロードを経て中国、日本に伝わりました。日本に伝わった仏教は仏教後期といえる大乘仏教の思想によるものです。

釈迦はお祈りするのはいいとしても、「己の利益のために祈るな。人の幸せのために祈れ」と言っています。祈るのなら、人のために夫婦円満や合格をお祈りし、あるいは自分の家族が今日、健康で幸せであることについて感謝の気持ちをお祈りすることを説いているのです。

日本のある宗教研究者が釈迦の思想を文学的に表現した非常に良い言葉があります。

釈迦の思想をひと言でいうならば、「我々は、儂く散る桜である。だからこそ、精一杯咲こう」

こういう言葉になるというのです。この言葉を聞いて私は大変感動しました。これは良い言葉だと思います。我々は来世も前世も、あるいは未知なるものにも目を向けなくてよい。我々は儂く散る桜であるからこそ、現在を真剣に、一生懸命に、咲こう。

この言葉を知ることによって最近の私は、些か安心立命の境地を得つつある、というふうに思っております。

『人間—釈迦—の発見』より抜粋
平成 16 年 10 月発行
B5 判 78 ページ

私の人類文明論

釈迦について

私は50歳のころに偶然、釈迦の思想、原始仏教、原始仏典に接する機会があり、まさに目から鱗の落ちる思いを致しました。

常日頃、私は、日本の仏教に疑問を持っていました。大乘仏教があり、小乗仏教がある。自力本願といい、又他力本願という。相矛盾する言葉が仏教にはありますが、白であると同時に黒であるということは、この世ではあり得ません。白か黒かどちらか一つでしかあり得ません。自力本願というのは、戒律を守り、懸命に禁欲的な修行をした拳句、悟りを開くのですが、他力本願は、そういう苦勞は一切いらぬ。ただ念仏を唱えて、阿弥陀如来におすがりすればよい、ということです。又、大多数の男性は私のように、女性を見るとふらふらと好き心を誘われるわけですが、「姦淫するなかれ」というのは、仏教の根本である五戒の一つです。ところが、インドの密教では、歓喜仏という男女のセックスをしている像が祀られています。セックスこそ最高の極楽だと賛美されているわけですが、先程の戒律とは矛盾するのではないのでしょうか。そして又、殺生をしてはいけないのだから、自分の肌にとまっている蚊を叩くのもいけないという反面、親鸞の教えでは、親を殺した大悪人でも、いまわの際に「南無阿弥陀仏」と唱えて、阿弥陀如来を信仰さえすれば極楽へいけるという、これも矛盾した話です。

いったい、釈迦の説いた教えというものは、本当はどんなものなのか知りたい、という思いを私は多年持っておりまして。

ところが、50歳頃、ふとしたことから、原始仏典と大パリニッパーナ経（これはお釈迦さんが亡くなる前、最後の6ヶ月の旅の様子を書いた経典です）の日本語訳を読みました。日本にある仏教というものは、大乘仏教といわれますが、それ

まで僧侶から聞いて、知っておりました釈迦や大乘仏教とは、全く違うものをこれらの本に発見して、大変驚きました。

日本の仏教には、いろいろな宗派があります。天台、一向、日蓮、真言、浄土や創価学会など、たくさん宗派があるのは、釈迦に対する誤解から出ています。

今、世界の宗教学者の間では、お釈迦さんの正しい姿はほとんど解っているのですが、日本では大乘仏教という、あまりにも釈迦の教えからはずれた幻想文学の中に閉じ込められているために、正しい釈迦を勉強する機運が非常に少ないようです。

釈迦は宗教家ではなく思想家、哲学者であり、修行者であったのです。ですから釈迦にバイブルはありません。

大乘仏教でいう前世、来世、靈魂、輪廻転生、因果応報、こういうものを釈迦はすべて否定しています。それを言っているのは、実はヒンズー教なのです。釈迦はそういうヒンズーの思想を否定した人なのです。釈迦は、超自然的なことを否定して、客観的に先入観無しに、素直にものを見ることを説かれた人です。

私は、ヒンズー教というものは、靈魂本体論だと考えています。ヒンズー教では前世に靈魂があり、死んで肉体が減びても、靈魂は現世で又復活する。そして現世の肉体が死ぬと靈魂は、来世で又新しい肉体に入ると言います。ヒンズー教で絶対的な存在は靈魂なのです。

ところが釈迦は、我々の靈魂は、この世に生きていうちだけあるもので、死ぬと靈魂はなくなる、ただし、我々の肉体を構成する物質は、変化しながら地球上に存続していくと説いています。

それで私は、ヒンズー教のように靈魂が生まれ変わるのを「輪廻転生」といい、釈迦のいう肉体の構成物質の変化を「生々流転」ということにしております。

たとえば神社やお寺にお参りして、お賽銭をあげても、商売繁盛、家内安全、受験祈願と数々の願い事をするのでは、釈迦の教えでは善行ではないのです。

ヒンズー教では、善行をすれば、今世でよくなくても来世でよい報いがあると教えます。インドではカースト制度という身分による差別があります。バラモン、クシャトリア、バイシャ、シュードラで、シュードラは最下層で人間扱いをされません。

そういう差別があるのは、前世で悪いことをしたから、この世でシュードラや身障者など社会的弱者に生まれたのだと考えるからです。インド的に、あるいはヒンズー教の教えで言うと、ハンディのある人は、前世で悪いことをしているからなので、そういう人たちに対して同情はありません。

しかし釈迦は、前世の因果が現世に報いとして現れることはあり得ないし、現世の因果が来世に報いられることもないと説いています。我々が立派に生きるかどうかは、すべて我々自身の信念と実行にかかっているというのが釈迦の思想です。

釈迦の合理的な考え方を私なりに置き換えてこんな話を考えてみました。

もし靈魂が生まれ変わるものであるなら、釈迦生存の頃の地球上の人口は約1億人でありましたが、現在は56億人いるのですから、靈魂の数が足りないこととなります。ですから現在では魂のない人がいるか、あるいは1つの靈魂が2つも3つにも分裂して、2卵性あるいは3卵性靈魂になっている人がいるかだ、といえましょう。

私は釈迦の説かれた言葉は、現代物理学にぴったり当てはまると思います。存在するものは必ず減びる。これはエントロピー論です。

そして存在物は減びても、無くなるのではない。私の体が減びても、肉体の構成物質は分解して他の物質として存在します。これは「質量＝エネルギー」というアインシュタインの法則

です。質量、つまり物質は、ある状況ではエネルギーになる。エネルギーは又、ある条件の下で物質となる。

私が死んでも、質量＝エネルギーの法則に従い、私を構成した物質は地球上に存在する。しかし私として再び現れることは、決してない。これが私の信念です。

私は釈迦の思想を読んで、世の中を客観的に見ることを教えられたと思っています。

民族、国家、戦争、平和などグローバルに考えるとき、釈迦がものを見るように、先入観を持たずにみられるようになったと思います。

私は、宗教とは人類が生み出した文化であると考えています。ですから、神や靈魂も人類の作りだしたものであると理解しています。

中国文明論

釈迦論はこれくらいに致しますが、釈迦の思想を理解したと思った56歳のころ、中国に行く機会がありました。行ってみて、私が常識として知っていた中国と、あまりにも違うので驚き、それから中国の勉強を始めました。

まず、中国は皇帝統治の国です。一つの王朝の末期に、統治が乱れてくると、蜂起した人民軍の首領が前の王朝を倒して新しい皇帝となります。そして皇帝にとって、人民とは権力で押さえつけて搾り取る対象でしかなかったのです。十八史略を読みますと、中国歴代の皇帝はほとんどそうであったようです。

中国では300年ほど続いた王朝が、漢、唐、宋、明、清と5つもあります。世界の歴史の中で一つの王朝が300年近く続くのは大変珍しいことです。

日本では、奈良、平安と江戸時代といいますが、江戸時代は、徳川幕府が300年ほど統治しまし

たが、奈良・平安朝は一つの王朝が支配したと言えるかどうか、ちょっと異論のあるところでしょう。

ところが中国では、5つの王朝が約300年を統治しています。そして300年の統治が続くところに、本当の文化が生まれたと私は思います。

中国では、日本人が尊敬している孔子のような人が出たんですから、立派な国だろうと思いますが、「十八史略」を読みますと、孔子の説いた徳治政治を取り入れた皇帝は、ほとんどいなかったようです。徳治政治とは、人民を統治する人物は、人望があり、高い見地から人民のための統治をし、人民がその立派さを尊敬して、従うようであればならないというものです。そういう徳治政治をやった皇帝は、非常に少なく、ほとんど覇権主義、マキャベリズム、刑罰主義で、韓非子と荀子、墨子のように、人民に対しては権力と法律（刑罰）であたるやり方が多かったようです。

中国では秦の始皇帝の時から、皇帝の直接統治が始まり、皇帝の意を受けた官僚が各地へ派遣され、それぞれの地方を統治するようになりました。

全国から採用する官僚の登用試験には、「四書五経」がテキストに使われていました。孔子の儒学にとっても、皇帝に忠節を尽くし、人民に対しても、皇帝を支えるよき補佐役として、清廉な行いをするよう官僚に要求しながら、皇帝自身は、孔子の思想を尊重していません。秦の始皇帝しかり、漢の劉邦しかり、十八史略を読むとほとんどの皇帝が、自分自身には、孔子の思想を当てはめていません。あの広い国土を統一するには、徳をもって治めるというような、穏やかなやり方では不可能でしょう。

それからもう一つ申し上げたいのは、日本では儒教と儒学が混同されているということです。

儒教は民間宗教です。たとえば祖先の祭祀をす

るのに、祭壇に豚の首を切って供える、というふうな民間宗教です。そこから出発してもっと知的にもの考えたのが、孔子の説く儒学で、説く人を儒家といいます。

日本は儒学を学んだのですが、それを儒教と言ったものですから、混同してしまったようです。日本が思想的に恩恵を受け、中国を尊敬する所以のものは、儒学及び儒家であります。

世界の歴史を見ますと、ヨーロッパ、中近東、ロシア圏などで、先祖伝来の地を追われて民族が大移動することはしばしばありました。日本は運良くそうなっていませんが、中国も又、漢民族がおおむね、あの地域に定住していました。

あの広い中国本土に、漢民族がおおむね定住していたけれども、王朝としての版図は、ものすごく広がったり縮んだり、という潮汐作用をしています。

しかし外圧でどんなに縮んでも、またはねかえず地力があつたのは、漢民族の自分たちの文化に対するプライドから来ていると思います。

また黄河と揚子江という2つの河が、漢民族のアイデンティティの骨格になっているようです。農耕民族である漢民族は、この2つの河から、様々な恩恵を受けています。

人類は誕生してまだ日が浅いのです。その人類が、文明というものを持ち始めたのは、約1万年前だと言われています。1万年前に、森林を焼いて農耕を始め、道具を作り、やがて村落が出来、町が興こり、都市文明へと発展します。都市文明のはじめは、今から5000年ほど前にインド、中近東あたりであったようです。

それから後は、人類は都市文明、物質文明をどんどん発展させてきました。それが今やピークに達して、限界に来つつあるのではないかと思います。

大量生産、大量消費をし、大量の産業廃棄物を出す。地球の資源は枯渇する。環境は劣化する。

ほかの生物の共生を阻害する。そうしてまで、いわゆる快樂とか繁栄を求めて、人類が地球上に君臨する資格があるのか。このことを反省する時期に、なりつつあるのではないのでしょうか。

特に、中近東からヨーロッパの一神教が、人類というものを過大評価していると思います。我々は多神教の素朴な生き方に共感し、人間が特別な生き物ではないことを理解する必要があるはしないのでしょうか。

人類は1万年前に農耕を始めてから、人口がどんどん増えてきました。今から2000年前に1億人であった人口が、現在56億人になり、21世紀の早い段階で100億になろうとしています。しかし、100億の人間が、日本のような生活レベルで生きられるでしょうか。それは絶対に不可能です。後進国があるから、一部の先進国が豊かな消費生活を楽しんでいるだけです。

昔は、一つの民族の人口が増えるのは、その民族の成長発展を意味しました。食料生産があがり、病気を克服し、戦争がなければ人口が増え、それはその国の発展・繁栄であったのに、今は、そういう条件を満たした先進国で、人口が減る事態が起きています。

今から15年前、私がパリからローマまで飛行機に乗ったとき、案内の人が、今から200年前、下に見える土地の80%は森林でした。今は20%しか森は残っていません、と言いました。

大地こそすべての源であり、大地の上に森があつてこそ、我々に必要なすべてのものが生まれてくるのですが、我々はその森をどんどん減らし、砂漠を増やしている有様です。

人間が神に似せて創られたとか、神に代わる特権を持っているというふうな尊大な思い上がりをもって我々は、物質文明・都市文明を追い求め、地下資源をやたらに使ってきましたが、自然のサイクルの中で、自然と共生するという知恵を、もう一度身に付けなかつたら、遠からず行き詰まる

でしょう。地球的な規模で考えて、地下資源は永久には続きませんし、環境は劣化します。それを前提にして、日本の都市問題、農業問題、あるいは環境問題から医療、老人問題までを、お考えいただきたいと思います。

人類のシェア（取り分）にふさわしく謙虚に生きる。その知恵を持つことが、人類がより長く、幸せに生きられる鍵なのではないか、と私は考えております。

我々の行動の根底に、そういう思想、あるいは行き方の基本的な考えを持つべきではないでしょうか。

最後に、私の好きなアメリカインディアンの言葉を紹介します。

アメリカインディアンの7つの教え

1. 静かに暮らさない
2. 謙虚に生きない
3. 人を許さない
4. 分かち合い与えない
5. 全ての生き物と平等に暮らさない
6. 万能の象徴を理解しない
7. 全ての物に感謝をしない

わたしたちは大地を慕っている

1855年、インディアンの首長シアトルが「インディアンの土地を買収し、居留地を与える」と申し出たアメリカの第14代大統領フランクリン・ピアスに宛てた手紙。

「ワシントンの首長が

土地を買いたいとやってきた。

どうしたら 空が買えるというのだろう？

そして 大地を。
わたしには わからない。
風の匂いや 水のきらめきを
あなたはいったい
どうやって買おうというのだろう？」

「松の葉の いっぼん いっぼん
岸辺の砂の ひとつぶ ひとつぶ
深い森を満たす霧や 草原にたなびく草の葉
葉かげで羽音をたてる
虫の1匹1匹にいたるまで
すべてはわたしたちの遠い記憶のなかで
神聖に輝くもの。
わたしの体に 血がめぐるように
木々のなかを 樹液がながれている。
わたしは この大地の一部で
大地は わたし自身なのだ」

「大地は わたしたちに属しているのではない。
わたしたちが 大地に属しているのだ……。
わたしたちは結局
おなじひとつの兄弟なのだ。
わたしが 大地の一部であるように
あなたも また この大地の一部なのだ」

「生まれたばかりの赤ん坊が
母親の胸の鼓動を 慕うように
わたしたちは この大地を慕っている」

『人類文明論』より抜粋
平成16年10月発行
B5判 24ページ



MY WAY — 私の歩いてきた道 — (F・シナトラの歌)

やがて私もこの世を去るだろう
長い年月 私も幸せに
この旅路を今日まで越えてきた
いつも 私のやり方で

心残りも少しはあるけれど
人がしなければ ならないことなら
出来る限りの力を出してきた
いつも 私のやり方で

あなたも見て来た 私がしたことを
嵐も恐れずひたすら歩いた
いつも 私のやり方で

人を愛して悩んだこともある
若い頃には 激しい恋もした
だけど私は一度もしていない
ただ卑怯なことだけは

人はみないつかはこの世を去るだろう
誰でも自由な心で過ごそう
私は 私の道を行く

I did it My Way

荒木 雄一郎訳による歌と語り